第3章 尾張藩による森林保護と地場産業の奨励（加工品産地として発展）

尾張藩による森林保護政策

木曽ヒノキをめぐる歴史

豊臣秀吉は木曽ヒノキを資源として高く評価し、天下統一後、木曽谷を直轄領としました。秀吉の没後、天下を取った徳川家康も同様で、江戸城の建築をはじめとする新都市建設のためなどに木曽谷のヒノキが使われました。

その後、木曽谷の木材権益は徳川御三家の尾張藩に引き継がれ、非常に多くの木材を利用していきます。良材の抜き伐りが行われ、伐られた木材は築城や造船、土木用材等のために利用、約100年間に及ぶ大量伐採により、木曽谷の木材資源は枯渇していきます。その後、露出した地面に自然に生え育ったものが、今日の樹齢300年クラスのヒノキです。

1600年代の過剰な伐採によって減ってしまった木を守るため、尾張藩は1708年（宝永6）にヒノキ、サワラ、アスヒ（アスナロ、ヒバ）、コウヤマキの4樹種を「停止木」に指定し、後にネズコも加えられました。これが五木禁伐木制度です。ヒノキを守るため、誤伐採の言い逃れができないよう、葉や樹皮の似たものを一括して禁じたものです。

五木禁伐木制度で、住民の自家用、仕事用の伐採も規制され、木曽から他領に通じる道には「白木改番所」が設けられました。違反すれば厳罰となり、磔や打首にさせられました。

尾張藩の森林政策は木曽の山の荒廃を防ぎましたが、山麓に暮らしながら木材が自由に使えず山に入ることさえ禁じられた地元住民は大変苦労し、その罰は「木一本首一つ」ともいわれました。

山村代官屋敷下屋敷の庭園

構成文化財⑫ 建造物 木曽町

山村代官屋敷（やまむらだいかんやしき）

■基本データ

住所　木曽郡木曽町福島5808-1

アクセス　JR「木曽福島駅」から徒歩約15分。伊那ICから30km40分

連絡先　TEL 0264-34-3160

指定　町有形文化財（1996年）

マップQR

江戸時代を通して、木曽谷を統治した山村氏の屋敷。山村氏は、約280年間にわたって代官の職務を担い続けました。

江戸時代を通して木曽を治めた山村氏

山村氏は戦国大名木曽氏の旧臣で、1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いでの功績により木曽代官を命じられ、同時に福島関所を預かり、以来明治維新まで木曽路11宿をふくむ木曽一帯を治めました。

大坂夏の陣後は尾張藩に属し、石高5,700石（1石は約180ℓ）に白木5,000駄（1駄は馬1頭に背負わせるくらい）が与えられ、福島関所の関守として幕府から旗本の一種、交替寄合の待遇を許されていました。

当時の屋敷図に見る壮大な屋敷構えは島崎藤村の「夜明け前」に書かれています。現存する遺構は下屋敷の一部で、1723年（享保8）以降に再建された12代良祺（たかのり）公の書斎「看雨山房（かんうさんぼう）」の書院づくりの座敷を中心に数室からなる「城陽亭（じょうようてい）」とその庭園です。また隣接する福島小学校敷地には、旧本邸の石垣の一部が残っています。

福島関所の関守（関所を守る役人）と木曽代官を兼ねていた山村氏は、江戸と名古屋にも屋敷を持つとても豊かな武家でした。その権力は強大で、「木曽の旦那様」といわれ、屋敷は大きく大変立派なものでした。

代官屋敷は中山道の福島宿本陣から木曽川を超えた対岸にあり、上屋敷があった場所は現在、福島小学校の敷地となっています。江戸時代の貴重な資料や甲冑、当時の豊かさが偲ばれる品々が展示され一般に公開されています。

1828年（文政11）の屋敷図によると、庭園が20もあり、そのうち築山泉水式の庭が5つ。そのひとつが現存する下屋敷の庭で、木曽駒ケ岳を借景としています。

お末社様

江戸時代、代官家を守る「山村いなり」に「木遣りを歌う」キツネが住んでおり「おまっしゃさま」と呼ばれました。町の人たちはその歌で吉凶を占ったといわれています。

明治時代、屋敷が取り壊されるという時に床下からキツネのミイラが発見されました。それ以来お稲荷さんの御神体として屋敷内に祀られています。

＊木遣り（きやり）は、労働歌の一つ、木遣り歌・木遣り唄とも。本来は作業唄だが、民謡や祭礼の唄として、各地に伝承されている。

構成文化財⑩ 自然・景勝地 木祖村

水木沢天然林（水木沢郷土の森）

みずきさわてんねんりん
みずきさわきょうどのもり

■基本データ

標高	標高：管理棟（1,223m）、最標高地点（1,565m）
所在地	木曽郡木祖村小木曽
開山	平成3年に約80haを公開
連絡先	（一社）木祖村観光協会 ／TEL 0264-36-2543
指定等の状況	中部森林管理局と「郷土の森」として保存協定

マップQR

江戸時代、城や城下町を造るために木曽山の木が皆伐された後、僅かに残された木から自然に種が芽生え、現在の森が形成されました。

現在樹齢約550年の巨木のサワラを始め、300年以上のヒノキやブナ、ミズナラ、トチノキなどの針葉樹と、広葉樹が混交する原生林です。トチノキが多いのは、トチの実を食用にしていたからです。

水木沢は笹川の支流のひとつで、木祖村の西側に位置する大笹沢山（2,040m）の稜線近くから流れ出す川幅約2.5mの小さな流れ。小支流でありながらその流域には樹齢200年前後の木曽ヒノキ・サワラ・ネズコや亜高山性のウラジロモミの他、ブナ・トチノキ・ホウノキなどの広葉樹の巨木が多く育成しており、針葉樹と広葉樹が混交した大変貴重な天然林です。

1991年（平成3）に当時の長野営林局（現中部森林管理局）と木祖村とで保存協定が結ばれ、「郷土の森」として約80haの国有林が公開されました。

豊かな森に育まれた水木沢を地域一体となった保全活動に取り組んでいることが評価され、2008年（平成20）に環境省による「平成の名水百選」に選定されました。

水木沢天然林トレッキング

林内には「原始の森コース」と「太古の森コース」のふたつの遊歩道に加え、水木沢の源頭部まで散策できる「源頭の森コース」も開かれています。

原始の森コースと太古の森コースはどちらも約1時間程度で一周することができ、両方のコースを8の字に周遊することも可能です。

原始の森コースから展望台へ上がるコースも整備されており木曽駒ケ岳などの眺望が可能で開放感あふれた一角となっています。また源頭の森コースは源頭部までの往復コースとなっています。

観光●水木沢天然林トレッキング

（一社）木祖村観光協会では、針葉樹と広葉樹が混交した天然林の周遊トレッキングのガイドを行ないます。

所要時間：4時間未満コース〔原始の森・太古の森〕
4時間超えコース〔原始の森・太古の森〕
5時間超えコース〔源頭の森〕
料金：8,500円～
連絡先：（一社）木祖村観光協会／TEL0264-36-2543

■主要参考文献／『木曽川源流の里トレッキングコースガイド』（木曽郡木祖村 2017）

今に息づく木材の活用

木曽領民のくらしを支えた地場産業

尾張藩の森林保護政策により山での木材の利用を厳禁された木曽領民には、木曽の風土に根ざした地場産品の生産が奨励されました。木曽代官4代目山村良豊（やまむらたかとよ）は、奥州から良馬の南部馬を買い入れ、木曽地域の風土に合う山坂に強い木曽馬に改良して、農民に飼育させることを奨励しました。また、禁伐（きんばつ）を課す代わりに領民の既得権（きとくけん）として藩から村に支給される御免白木（ごめんしらき）（使用が許可された材木を割って半製品にした材料）を利用しての曲物（まげもの）、漆器（しっき）などの工芸品や木材加工、養蚕（ようさん）、製糸業（せいしぎょう）、さらに御嶽山修験者から地元の人々に伝授された山野の薬草の製薬技術による「百草（ひゃくそう）」製造などを地場産業として積極的に奨励しました。地場産品と整備の進んだ中山道の流通経済を活かして産業振興を図ったのでした。

木曽馬は、性格がおとなしく小型であるため女性でも世話できる農耕馬であり、馬市場で売り買いされるだけでなく、領民の農耕・運輸にも大いに役立ち、江戸時代後期には領内に数千頭の木曽馬が飼育されていました。また、陶器に比べ軽く壊れにくい木工品や漆（うるし）を施し耐久性を高めた漆工（しっこう）品は、木曽路を辿り全国に広まりました。

こうして発展した木曽谷の地場産業は、江戸時代中期以降、領民のくらしを支えました。

木曽馬（木曽町）

南木曽ろくろ細工（南木曽町）

曲物（塩尻市）

木曽漆器（塩尻市）

構成文化財❷ 建物・町並み・重伝建（漆工町）
塩尻市

塩尻市木曽平沢（しおじりし きそひらさわ）

■基本データ
住所　塩尻市大字木曽平沢
アクセス　JR「木曽平沢駅」から徒歩約3分
連絡先　塩尻市教育委員会文化財課
／TEL 0263-52-0904
指定　国重要伝統的建造物群保存地区（2006年）
マップQR

木曽平沢は、中山道や奈良井川が南北に縦断する塩尻市南部の中央に位置し、奈良井川が大きく湾曲した河川敷に発達した集落です。木曽漆器の産地として知られ、漆工（しっこう）の職人町の面影を残す伝統的建築物とその景観が、2006年（平成18）に重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。漆工町（しっこうまち）としては国内初で唯一です。

漆器の販売店や工房が軒を連ね、中には作業場を見学できる工房もあります。うるし橋駐車場を起点にした約2.5kmの町の探訪コースも設けられています。

歴史的背景

1598年（慶長3）に奈良井川の左岸にあった道が右岸の中山道筋に替えられたことを契機に、周辺の山林に散在していた人々がその道沿いに集まり、集落が形成されていったと考えられています。

江戸時代初期に、平沢（当時は奈良井村平沢）地域で、漆塗りがおこなわれていた家があったと伝えられており、早くから檜物細工や漆器などの製造を生業（なりわい）としていました。安価で丈夫な生活用品として農村や都市部の庶民に人気でした。

その後、明治時代に入り、錆土（さびつち）の発見による本堅地漆器（ほんかたじしっき）の製造技術の確立、挽曲物の技法の発明による宗和膳の生産、木曽堆朱塗の技法の開発普及などが進みました。

特に大型の座卓が全国的に人気となり、1955年（昭和30）前後頃から木曽漆器の中心的な産地となりました。現在でも日本有数の漆器生産地としての地位を維持し続けています。

●保存地区

奈良井川の河川敷に広がる集落と、その北の丘陵に鎮座する諏訪神社を含んだ地域。東西約200m、南北約850m、面積約12.5ha。

指定地区

塩尻市大字木曽平沢字東町、字東町裏、字西町、字西町裏、字太田、字川原、字上ノ山、字宮ノ原及び字宮下の各一部

伝統的建造物等特定数

建築物198件、工作物20件、環境物件16件
（2023年（令和5）1月1日現在）

塩尻市木曽平沢重要伝統的建造物群保存地区範囲

町並みの特徴

地区のほぼ中央に、現在は本通りと通称される中山道が南北に縦断し、その西側に並行して金西町の街路が位置します。その両側に、近世後期に遡る奥行きの深い短冊状の敷地割が残されています。

この本通りと金西町の街路に沿って形成された町並みは、それぞれに異なった景観を見せています。本通りは、道の両側で漆器の店舗を持つ主屋が多く、漆器の町を印象づける景観であるのに対して、近代になって開削（かいさく）された金西町は、街路に漆器職人の住まいが建ち並ぶ職人町といった景観を見せています。

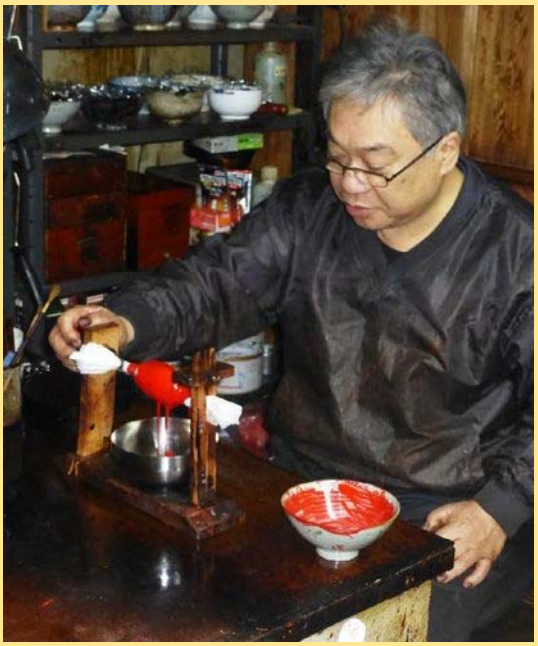
昭和の漆器産業が盛んだった時期の建物には様々な工夫が見られ、今でも住居の敷地奥の土蔵を作業場に使っている漆器職人の家は少なくありません。

文化財の修復

木曽漆器工業協同組合では、神社・仏閣・山車（だし）・舞台など文化財の修復・復元をおこなっています。

近年では、名古屋城の本丸御殿をはじめ、松本市深志神社（ふかしじんじゃ）の舞台などの修復・復元作業を手掛け、木曽漆器の伝統の技を活かしつつ、それぞれ独自の工法・技法を調べて建設当時の塗りの再現に成功しています。

●職人のエピソード



・江戸時代、明暦の大火のとき、平沢から大八車で漆器を運んで売り、大儲けしたエピソードが残っている。

・漆器が産業化したのは明治になってからで、お椀や重箱がよく売れた。高級路線ではなく、普段使いの漆器として人気が出た。

・昭和になると座敷テーブルや座卓、さらに旅館で使うお膳が大ヒットして、高度成長期の昭和40年代には、木曽漆器の年商は100億円にもなったという（現在は20億円程度）。技術も高く、ヒノキのわっぱ（めんぱ）を曲物でちゃんと作れるのは木曽だけと言われる。

・20年ほど前から全国の文化財の修復事業も手がけるようになった。山車やみこし、お寺関係などで、職人が足りなくなるほどの依頼が来る。なぜ他の地域ではなく木曽に頼むのかというと、座卓など大きいものを扱うノウハウを持っているから。
例えば45cm×180cmの大きさに漆を塗って乾かす技術は木曽ならではのものではないか。

・現在は依頼があればなんでも塗る。パソコンや車の内装を手がけることもある。

・平沢は昔から職人の町、モノづくりの町で、木地師、塗師などの職人は問屋から発注された製品を作り、奈良井を始め各地で販売されてきた。しかし近年は町まで人に来てもらえるようにしたいという考えが強くなっている。1970年代には奈良井宿から平沢へという観光ルートが人気で店売だけでも食べられた時期があった。その復活を目指して、町並み保存会が中心となり、週末に営業するカフェをオープンするなどの環境整備を進めている。

（小林広幸氏（伝統工芸士、塗師、春野家漆器工房）・談）

工房見学

木曽平沢にあるいくつかの工房では、漆器制作の現場を見学することができます。実際に見学すると、いかに繊細で手のかかる作業が施されているかがよくわかります。

中には、敷地奥の蔵や中庭などが見学できるところもあります。

店先で声をかけて了解を得られることもありますが、その日の作業や用事などでできない場合もあるため、事前に各工房に電話をして問い合わせておくとよいでしょう。

木曽くらしの工芸館（木曽地域地場産業振興センター）

●木曽くらしの工芸館（塩尻・木曽地域地場産業振興センター）

国道19号線沿いにある道の駅「木曽ならかわ」内にて地場産品の販売を行っています。木曽漆器コーナーは、作り手ごとに分かれており、好みに合った漆器や職人を探すことができます。週末には、職人の伝統技術を間近で見学しながら交流できるイベントも開催しています。また、塩尻ワインや地元の新鮮野菜等も豊富に取り揃えており、中庭のカフェ「ル・ボワ」では季節の食材を使用したジェラートや人気のシェフ特製カレーを味わうことができます。

住所：塩尻市木曽平沢2272-7
営業時間：9：00～17：00
定休日：無休（冬期は毎週火曜日休業。その他臨時休業あり）
連絡先：TEL 0264-34-3888

木曽漆器館

●木曽漆器館

国指定重要有形民俗文化財「木曽塗の製作用具及び製品」、国・県重要無形文化財保持者などの漆芸作品を展示し、木曽漆器の製作工程や製品についてわかりやすく解説しています。

住所：塩尻市大字木曽平沢2324-150
営業時間：4～11月は9：00～17：00、12～3月は9：00～16：00
最終入館時間は閉館30分前。
料金：大人（高校生・大学生含む）300円、中学生以下無料
定休日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始。
冬季臨時休館あり
連絡先：TEL 0264-34-1140

木曽漆器祭

●木曽漆器祭

６月第一金・土・日の3日間、木曽平沢では年に一度の大漆器市「木曽漆器祭」が盛大に開催されます。国の重要伝統的建造物保存地区の町並みには漆器店が一堂に並び、職人の精魂込めた逸品や、この期間しか出ない製品や蔵出し物が手に入ります。

隣接する奈良井宿では「奈良井宿場祭」が同時開催されます。

連絡先:木曽漆器祭・奈良井宿場祭実行委員会
TEL 0263-52-0871

構成文化財❸ 工芸 塩尻市

曲物（まげもの）

■基本データ
主な生産場所 塩尻市
発祥 江戸時代前期
指定 県伝統的工芸品（1982年）
産地組合 木曽漆器工業協同組合
／TEL 0264-34-2113

マップQR

曲物は、食器類を中心とする日常生活用品として、江戸時代より、木曽漆器発祥の地といわれる木曽町の八沢、塩尻市の奈良井で多く製造されてきました。

古くは、江戸時代初期の1607年（慶長12）に木曽代官、山村良勝が発給した「奈良井村書出之事」のなかに、すでに檜物細工（ひものざいく）を作っている者がいたことが記されています。諸国の名物を記録した1638年（寛永15）の「毛吹草（けふきぐさ）」には、「奈良井曲物」が挙げられており、奈良井村の檜物細工は「奈良井物」と呼ばれ、人気を博していたようです。安価な庶民向けの食器類が主流でしたが、木曽ヒノキの品質の良さで高い評価を得ていたことが、記録から確認できます。

1661～1672年（江戸・寛文期）頃より、白木細工に耐久性や見栄えをよくするために漆を塗るようになったといわれています。「養生訓（ようじょうくん）」で知られる儒学者で本草学者の貝原益軒（かいばらえきけん）が、1685年（享保2）に中山道を旅した折に、「奈良井の町、民家百ばかり有り、此町に、わん、おしき、まげ物などをぬりておほくうる」と記しています。

1716～1736年（享保年間）の「尾・濃・信・江御領分産物全」には、八沢の製品として、小判面津・丸型面津（メンパといわれる弁当箱）・菜入れ・切り留め角指し（刻んだ野菜や煮物などを一時的に保管するための器）・丸七つ鉢・飯次・通盆丸角・足附き丸盆・弁当箱・重箱・膳・箱膳・湯桶などが記されています。

これらの製品は中山道を通じて、江戸や高崎、京都、大阪などへ送られ、問屋によって売られていきました。尾張藩から割り当てられた御免白木（ごめんしらき）で作られた統制品だったため、出荷証明書である「御免檜物手形（ごめんひものてがた）」がないと弁当箱1個たりとも持ち出しは許されなかったといいます。

明治時代には、八沢のメンパが陸軍の弁当箱に採用され、需要が高まった時期がありました。また、1943年（昭和18）頃の戦時中は、木地のままの小型丸形の曲物が、保革用の油淹れとして陸軍に採用され、工場で生産されました。

漆器産業は戦中・戦後の混乱期を乗り切れずに衰退していきましが、昭和30年代の高度成長期に平沢の座卓の需要が拡大し、地元業界の様々な試みが奏功して、伝統工芸品としての地位を確たるものとしました。なかでも曲物は現在も木曽漆器の人気商品のひとつとなっています。

曲物の人気のヒミツ

木曽ヒノキを薄く剥いだ板（へぎ）を熱湯につけて曲げ、カンバ（山桜の皮）で綴じ、側板に底や蓋をはめて木地を作り、漆を塗って仕上げられた円形の器。メンパ（小判型や丸型の弁当箱）、ひしゃく、湯桶、そば用具などが作られています。古い物は木目が透き通って見える拭き漆、春慶塗りで仕上げられました。

国内各地で作られている伝統工芸品ですが、秋田スギと並んで、木曽ヒノキの曲物は有名です。ヒノキは抗菌作用が高く、食材が傷みにくい。冷めてもご飯をおいしく保ち、何を盛り付けても絵になるということで、曲物の弁当箱が男女、世代を問わず人気となっています。

●雅子さまの納采の儀の器を手掛けた曲物師・村地忠太郎

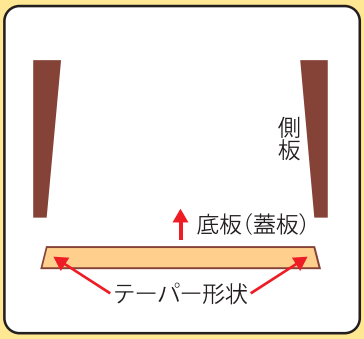
漆器は土台となる木地によって、その出来が大きく左右されます。1917年（大正６）木曽福島に生まれた村地忠太郎は、十代半ばに父親に弟子入りして以来、80年以上、曲物一筋に生きてきた名工です。

美しい木目を引き出し木地を仕立てる精緻な技術は高く評価され、雅子さまの納采の儀の器など皇室の公式行事に使用される道具や弁当箱などを手掛ける宮内庁御用達木地師となりました。

2012年に厚生労働省より「現代の名工」として表彰されました。2019年に逝去。

曲物の構造と技法

●特徴　２種類の木材



他の産地では通常1種類ですが、木曽の曲物には２種類の木が使われています。側板に木曽ヒノキ、蓋と底には木曽サワラを組み合わせる場合が多数。

蓋と底に木曽サワラを使用している理由は、その高い吸水性・保湿力を活かすためです。サワラはご飯の余分な水分を吸い、しっとりと保ってくれるため、昔から、おひつやすし桶に使われてきましたが、硬くて曲げる細工は難しく蓋と底に使うことで、その特徴を活かしています。豊富な森林資源に恵まれているからこそ、木の性質を活かして使い分けることができました。

側板の特殊な構造

木曽の曲物の側板は上が薄く、下にいくほど厚い。丸い形状の場合、外周と内周の差は2π×厚みになるので、厚みが増すほど円周差が大きくなり割れやすくなります。それを回避するため木への負担を円周差の少ない薄い部分に逃しています。同時に、蓋板や底板の反りを軽減し、熱いものを入れた際に木が収縮する力を逃すためです。

他の産地ではこうした形状はみられません。機械に通すことができず、手間が増えるうえ、精度を出すことが難しいためです。

「すり漆」の技法

白木地に下地処理をせず直に生漆を摺りこむように塗る技法です。木の呼吸を損なわず、メンテナンス性や強度を高めることを実現しています。

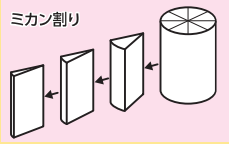
重厚な漆器は扱いが難しそうということで敬遠される傾向にありましたが、この技法で作られたものは、気軽に洗うことができ、手入れがしやすいことも人気の一因です。

また、漆にも抗菌作用があり、ヒノキの抗菌作用と相乗効果で、食材が傷みにくくなっています。

●製作工程（図・写真提供：花野屋）

主な工程は次のとおり。
①木取り→②削り→③曲げる→④留めをつける→⑤底板、蓋板をはめる→⑥漆を塗る

①木取り・削り



ミカン割りで粗く割った材を木目に沿ってヘギなたで厚さ2～3mmに割りはがす。割った木を胸当ての防具に固定して「さっとう」という刃物で薄く削る。

②曲げる

曲げやすくするために側板を煮てから、「ほた」という木製のコロに巻き付けて曲げていく。

③留めをつける

曲げた板を木ばさみで挟んで、一昼夜乾燥させる。合わせ目を糊で留めて乾燥させる。

④はめる

合わせ目に「木さし」で穴をあけ、なめして細長く加工した山桜の皮で綴じる。側板に蓋板、底板をはめ、木地が完成する（白木地）。

⑤塗る

白木地に生漆を塗り、木地の変形を防ぐ木地がためを施す。乾いたら、つなぎ目にコクソ（生漆と木粉、米糊などを混ぜたも）をへらで塗りつけて補強。一晩乾燥させ、生漆と地の粉を混ぜたサビをつけてなめらかにする。サンドペーパーで全体を研いでから、漆を塗る。

＊漆を刷毛につけ、摺りこむように塗るため「すり漆」といわれます。また、漆を塗った後に布や紙で拭き取ることから、「拭き漆」ともいわれます。
＊漆を塗って、乾いたら紙で拭き取る作業を数回繰り返して完成。

お弁当ブームが続くなか、曲物の弁当箱が人気を呼んでいます。プラスチック製などと違って冷めてもご飯がおいしいといった評判です。生産が追いつかず、品切れ状態が続いたり、ネット通販を中止したりしている店も少なくありません。
「ひとつひとつ職人が作っているものですから、生産が追いつかなくて。お店に来ていただいたお客さんには対応しています」
（奈良井の花野屋さん談）

■主要参考文献／
『木曽～歴史と民俗を訪ねて』
（木曽教育郷土館部編著 信教出版部 2010）
『木曽路大紀行＜信州の大紀行シリーズ２＞』
（一草舎出版 2007）
『木曾平沢～伝統的建造物群保存対策調査報告』
楢川村町並み文化整備課 2005
『あれこれ木曽町再発見 木曽町を学ぶ』
（木曽町を学ぶ本つくり検討会 木曽町観光協会2013）

構成文化財❹ 建造物・重要文化財 塩尻市

旧中村家住宅（きゅうなかむらけじゅうたく）

■基本データ

住所	塩尻市大字奈良井311
アクセス	JR「奈良井駅」から徒歩10分
連絡先	TEL 0264-34-2655
指定	国重要文化財（2020年）
入館料	大人300円／中学生以下無料 （団体割引あり／20名以上1名様240円）
開館時間	4月～11月は9時～17時／12月～3月は9時～16時 ※入館は閉館の30分前まで
休館日	4月～11月は無休／12月～3月は毎週月曜日・祝日の翌日※月曜が祝日の場合はその翌日

マップQR

塗櫛の創始者・中村恵吉の分家にあたる櫛問屋。1843年（天保14）頃の建築で、街道に面した表の部屋は蔀戸（しとみど）になっており、二階部分を少しせり出させた出梁（だしばり）造り、鎧庇（よろいひさし）など、江戸時代の典型的な奈良井の町家の様式を残しています。

資料館として一般公開されており、当家の間取り図や幕末～明治の櫛商人の金銭出納帳などの文書や塗櫛（ぬりくし）・笄（こうがい）などが展示されています。

2020年（令和2）12月、主屋と土蔵が国重要文化財に指定されました。

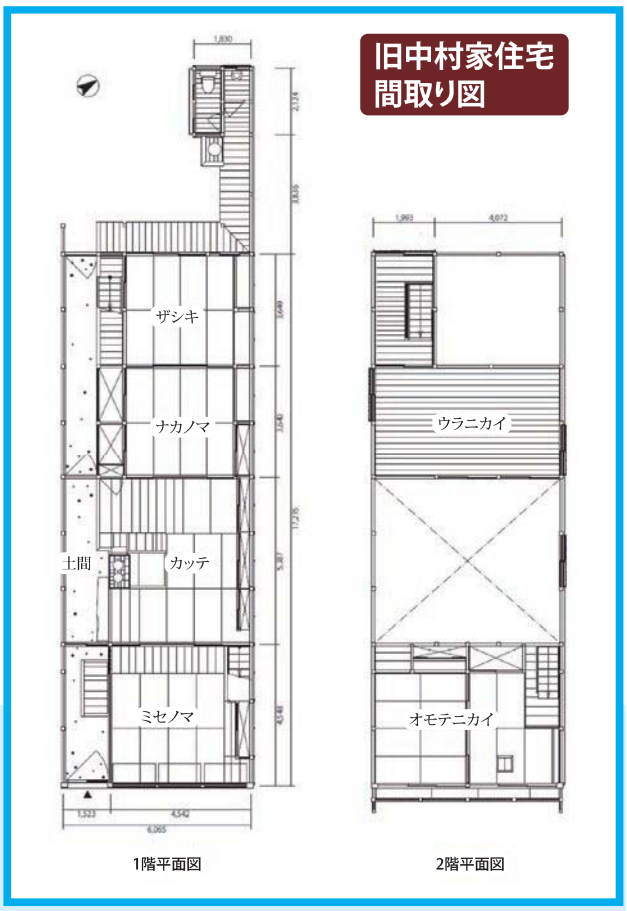
町並み保存の象徴

旧中村家住宅は、1969年（昭和44）、神奈川県川崎市にある日本民家園への移築が予定されていましたが、現地保存を望む地域の声を受けて、当時の楢川村が敷地と建物を中村家より寄贈を受け、保存活用を図っていくこととなりました。この出来事を契機に、奈良井では町並みや建造物の保存について意識されるようになり、1978年（昭和53）の国重要伝統的建造物群保存地区の選定となりました。奈良井の歴史的町並みの保存活動の原点ともいえる建物です。

旅籠としての中村家住宅

文献史料によると、奈良井宿では旅籠を主たる生業（なりわい）とする町家は江戸中期以降、10数軒しかなく、1843年（天保14）頃はわずか5軒であったとされています。

旧中村家住宅のオモテニカイは、板敷の部屋としても畳敷の部屋としても使用できる形式となっており、参勤交代などの大通行時には、必要に応じて旅籠の居室としても使用されるなど、塗櫛の作業場としての機能と旅籠の機能を併せ持った部屋であったことが分かりました。



外観意匠・間取り

建築年代は、絵図や文献史料から、主屋・土蔵共に江戸時代後期の1837年（天保8）の大火後、1843年（天保14）までに建てられたとみられ、以後、数度改修や修理等が行われていますが大きな改変はなく、旧状をよくとどめています。

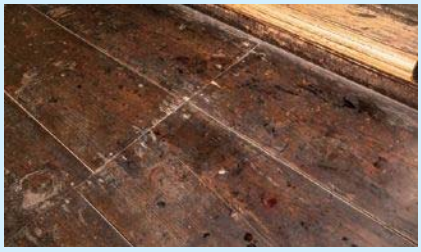
主屋は、南側に正面から背後に通じる土間と1列4室（ミセノマ・カッテ・ナカノマ・ザシキ）の居室列からなり、ザシキの南側の土間との間はウラニカイへの上がり口を備えています。2階はミセノマ上部にオモテニカイを設け、間仕切りによって北側と南側の2室に分けています。カッテ上部は吹き抜けとし、ナカノマ上部にはウラニカイを設けています。

ザシキ上部は部屋とはせず、この南側はウラニカイへの階段室としています。こうした間取りは、木曽11宿における町家の最も一般的な間取り（1列型町家）です。

表構は、1階土間正面の潜戸付きの大戸、ミセノマ前面の上下3枚のシトミ戸を残しています。また、2階の縁部分が出梁によって一階より前に張り出す、この地方の呼称である出梁造り（だしばりづくり）となっており、さらに奈良井宿の表構の特徴ともいえる、出梁の先端の桁にサルガシラと呼ばれる桟木で横板をおさえた、コヤネと通称する板庇を付けています。

櫛問屋としての機能

主屋内には漆塗り作業を行った物証が残っており、1階ミセノマでは、箱階段の内部が漆を塗った櫛を硬化させる、室（モロ・ムロ）としての機能を有していたことがわかりました。また、2階のオモテニカイの床板には漆の痕跡があり、さまざまな色の漆を使用する加飾等の仕上げ塗りの作業が行われていたことが判明しました。



土蔵は、通常の収蔵を主目的とした土蔵とは異なる点が多く、構造、部材の様相、室の存在、床板に付着して残る漆などから、1階、2階で漆塗りの作業がおこなわれた塗蔵であったことが明らかになり、近傍の重伝建地区の漆工町木曽平沢の塗蔵の原型ともいえるものです。

■主要参考文献／『旧中村家住宅調査報告書』（塩尻市教育委員会 2019）

構成文化財❻ 工芸・有形民俗文化財 塩尻市

木曽塗の製作用具及び製品

■基本データ

主な生産場所 塩尻市
発祥 諸説あり、江戸時代中期以降全国に知られる
指定 国重要有形民俗文化財（1991年）
連絡先 木曽漆器館／TEL 0264-34-1140

マップQR

「木曽漆器」とは、主に塩尻市木曽平沢周辺で作られている伝統的な漆器を指します。漆器とは、漆塗りを施した木製品のことで、塗物ともいわれました。

江戸時代より木曽物といえば平沢で生産されたものと言われるまでその名を広め、昭和の高度成長期には木曽平沢の座卓等の大物漆器でその存在をより知らしめました。

1975年（昭和50）、経済産業省より「木曽春慶」、「木曽変わり塗」、「塗り分け呂色塗」の3つの技法が伝統的工芸品として指定されました。また1991年（平成3）には、「木曽塗の製作用具及び製品」3,729点が、国の重要有形民俗文化財に指定されました。

木曽塗の歴史

木曽地方は、平地が少なく、寒冷地のため、農業には適していませんでしたが、木曽五木（ヒノキ・サワラ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコ）に代表される良質な木材に恵まれたため、早くから木製品の加工に従事する人が多くいました。

塗物については1665年（寛文5）「檜物駄詰覚」に記された「ぬり小丸ぼん」が最初で、木製品を丈夫にするために漆を塗ったことから始まったといわれています。江戸中期には平沢、奈良井の塗櫛や薮原のお六櫛が中山道を通る旅人の土産として人気を呼びました。

海抜およそ900mの高地で、夏は涼しく冬は寒く適度な湿度等、漆器づくりに適した自然環境も発展をうながしました。

曲物などに代表される木製品（木地）に直接漆を塗り重ねた春慶塗りを中心に製造していましたが、明治初期に奈良井で錆土という良質な下地素材が発見されたことで技術革新が起きます。さらに原材料の確保や技法の進歩が次々と進み、庶民の生活用具としての漆器だけではなく、高級調度品など様々な製品を作りだし、木曽漆器の産地として飛躍的な発展を遂げました。

漆器館に展示されている錆土

■主要参考文献／『木曾平沢~伝統的建造物群保存対策調査報告』楢川村町並み文化整備課2005
『漆塗りの技法書』十時啓悦、工藤茂喜、西川栄明（誠文堂新光社 2015）

●製作工程

主な工程は次のとおり。
①木地作り→②下地作り→③塗り→④加飾

①木地作り
漆器の土台となる、木工品の加工。釘などを使わず、木材を組み合わせて家具や箱、茶道具、重箱などを作る「指物（さしもの）」、ヒノキやスギなどの柾目の薄い板を曲げて丸や楕円の側板を作り、底板や蓋をはめて丸盆や弁当箱などを作る「曲物」、ろくろなどで木を挽いて円形の器を作る「挽物（ひきもの）」、厚い板をくり抜いてつくる「刳物（くりもの）」などがある。原木から板を切り出すことを「木取り」といい、柾目（まさめ）と板目が代表的。切り出し方によって木目が変わる。木曽漆器にはヒノキの柾目板を使用する。柾目とは、製材する際、中心に向かって挽いた時に見られる年輪が平行な木目のことをいう。ほぼ均等に木目が並んでいるため美しく、収縮や反りの歪みが出にくいが、高樹齢の大径木からしかとれないため、価格も高い。板目は、木の中心を外して木の幅いっぱいに板取りしていくので、木目が大きな波のようになり面白味がある。柾目より安価になるが、歪みが生じやすい。

②下地作り
漆器作りの基礎となる重要な工程。器の表面を整えて木地の弱いところを補強する。その土地特有の地の粉や砥石の粉を漆に混て何度も塗ることで強度を増す。漆器の強度はこの作業に左右されるという。現在最も使われているのは、本堅地（ほんかたじ）で、地の粉や砥の粉を水で練ったものを生漆に合わせて下地用漆を作り、へらなどで木地に塗りつけていく。漆の代わりに柿渋、炭粉を使う渋下地という手法もある。

③塗り
木地に漆を塗る職人は、塗師（ぬし）といわれる。塗りは、木地に黒漆を塗り磨き炭で研磨する「下塗り」、さらにもう一度下塗りしたものに黒漆を塗って磨く「中塗り」、黒漆や透漆（すきうるし）、朱漆などを塗って仕上げる「上塗り」の３工程がある。漆器館に展示されている錆土漆を塗ってから乾かす際、湿気の多いムロ（室）で乾燥させる。漆の樹脂が固化する過程で働く漆の酵素を活性化するために、20 度以上の温度と60%以上の湿度が必要といわれている。チリやホコリも大敵なので、職人はひとり黙々と作業する。

④加飾（かしょく）
基礎技術は大陸伝来とされているが、奈良時代には様々な装飾法が用いられていた。さらに漆芸の装飾技術は江戸時時代の経済発展とともに大いに進化していった。代表的な手法は４つ。

・蒔絵（まきえ）……日本で進化発展した装飾技法で、すでに平安期には確立されていた。上塗りした漆器に漆を筆で模様や絵を描き、その上に金粉や銀粉を蒔きつけて乾かすと絵や文様が浮かび上がる。さらにその上に漆を薄く塗って固めて表面を磨きあげる。

・箔絵・切箔（はくえ）……表面に漆で文様を描き、その上に金銀の箔を貼って文様を描き出す。

・沈金（ちんきん）……上塗りした漆器の表面を小刀やノミで細い文様を彫り、文様周辺に漆を塗って、箔金粉を文様の溝に押し込む。さらに漆を薄く塗って固めると、金色の彫り文様が浮き上がる。

・螺鈿（らでん）……漆器の表面を彫って光沢のある夜光貝などを埋め込む方法と貝を漆器表面に貼ってその上に漆を塗り重ねていく方法がある。

●塗りの技法

木目を活かす塗りと黒塗りや朱塗りなどの不透明な塗り、変わり塗りがある。

・摺漆（すりうるし）
ケヤキやトチなどの木地を十分磨き上げたあと目止めをし、木肌が透けて見える程度に数回生漆を塗っては拭き、または塗っては拭きを繰り返して仕上げる。下地塗りが省かれるため、木目の持つ素朴で温かな味わいが伝わってくる技法。
代表的な商品：家具・文机・お盆・広蓋・コタツ板・小引出しなど

・木曽春慶（きそしゅんけい）
薄紅色の彩漆で色づけした後、生漆を何度も摺り込む。最後に透明度の高い春慶漆を塗って仕上げたもの。木地のもつ柾目の美しさが際立つ木曽の伝統的な塗技法の一つで、錆土が発見されるまでは主要商品だった。
代表的な商品：メンパ・そばセイロ・湯筒・コップ・盆・重箱・平皿など

・木曽堆朱（きそついしゅ）
たっぷりと漆を含ませたタンポを使って「型置（模様づけ）」し、型置され凸凹のできた面に彩漆を何度も（通常12 回～18 回）塗り重ねていく。表面が平らになったら、水ペーパーと砥石で塗面を研磨することで木の年輪に似た独特の模様が表れる。
代表的な商品：座卓・お盆・茶托・菓子鉢・茶檀・箸立て・花器など

・呂色塗り分け塗（ろいろぬりわけぬり）
砥石を使って錆研ぎをおこない、木曽地域では「ジヌリ・ナカヌリ」と呼ぶ独特の中塗りを施した後、多種の精製彩漆を用いて塗り分け作業を施す。コキ研ぎをして、上塗りをして乾燥後、やわらかな木炭の粉末で磨き、さらに鹿の角の粉末に菜種油と砥の粉を混ぜて丹念に艶出しをして仕上げる。鏡面のような美しさ。
代表的な商品：座卓・呂淵・重箱・菓子鉢・飾り棚など

・溜塗（ためぬり）
下地工程が施された木地に中途の段階で朱漆や黄漆などの彩漆が塗られ、最後に透明な溜漆を塗りっぱなしした状態で仕上げる。下の彩漆によって紅溜、黄溜などと呼ばれることもあり、下地に深く重ねられた彩色を鮮やかに浮かび上がらせる。
代表的な商品：お盆・花台・重箱・文庫・お椀・飯切りなど

●漆について

漆には接着剤、塗料としての働きがあり、一度乾固すると酸やアルカリに強く、防水・耐水性も優れているため、古来より私たちの生活に役立てられてきました。

漆はウルシ科の落葉高木樹（10～20m 位）で、木の幹に傷をつけると樹液が分泌します。この液が「漆」で、主に6～11 月頃にかけて採取されます。1 本の木から年間60～250g 程度しか採取できないので、大変貴重品とされています。漆は日本でも採取されていますが、その量はほんのわずかで、現在はアジア産（特に中国産）が主に使われています。

漆掻き職人による採取風景

1998長野冬季オリンピックメダルを制作

冬季オリンピックの入賞メダルは木曽漆器の産地職人がひとつひとつ手作りしました。オリーブをあしらったリング状の外枠の中の「朝日」と、片面の「エンブレム」、信州の山々の「朝焼け」を蒔絵で表現したもので、現物を木曽漆器館や木曽くらしの工芸館で見ることができます。

●給食用食器としての利用

木曽漆器は地元の小中学校で給食用食器としても使われています。同様の食器セットが木曽くらしの工芸館でも販売されており、贈答用としても人気があります。

給食の様子

漆器の給食用食器

塗分け呂色塗・重箱（ぬりわけろいろぬり・じゅうばこ）

木曽春慶塗（きそしゅんけいぬり）

若手職人たちの挑戦

近年は、若手職人らが中心となり、伝統的な木曽漆器の技術を応用して現在の生活様式に合った製品づくりが積極的に行われています。柔軟な発想でガラス製品や革製品等への漆塗りに挑戦し、注目を集めているほか、漆器を「借りる」という新たな発想の取組を考案するなど、産地活性化につながる動きが出てきています。

若手職人の岩原祐右さんは、米国製大型バイクに「堆朱（ついしゅ）塗り」で黒漆を塗り重ね、さらに「白檀（びゃくだん）塗り」で炎の柄を描きました。光が当たると堆朱独特の模様が浮き出し、特別なクラシックバイク感が出て注目されました。

木曽漆器若手作家　岩原祐右さん
ヘルメットに漆を塗っています。

構成文化財❾ 無形民俗文化財 木祖村

お六櫛の技法

■基本データ
主な生産場所 木曽郡木祖村
発祥 江戸時代
指定 県伝統的工芸品（1982年）、同無形民俗文化財（1973年）
連絡先 木祖村教育委員会／TEL 0264-36-3348
木祖村役場／TEL 0264-36-2001

お六櫛の名の起こりは、頭痛もちのお六が、家の近くのミネバリの樹を櫛にして髪を梳いたことにより全快したとの伝説からです。現在でも薮原ではその伝統的な技法を引き継いで製造されています。実演見学や体験もできます。

お六櫛の歴史

木櫛は、森林資源に恵まれた木曽谷で、木地、檜物細工、漆器、桧笠、下駄などとともに、古来から木材加工業のひとつとして発達してきました。その発祥は定かではありませんが、お六櫛伝説が生まれた妻籠宿や蘭村では元禄中期頃から木櫛が生産されていました。材料としていたミネバリが鳥居峠周辺に多くあったことから、享保年間前後に薮原宿がお六櫛の主産地となりました。

これには、1704～1711年（宝永年間）の五木伐採停止と檜物手形の配給制限、享保検地後の藩の諸統制の強化などが影響したのではないかという説もあります。

薮原宿では檜物細工と漆器が中心でしたが、それまで櫛木として半製品のまま移出していたものから、完成品の製造に切り替えていきました。当初は櫛歯が不揃いで粗野なものでしが、寛政～文政年間に太右衛門という者が両歯に改良し、扇屋新次郎によって歯立て法などが工夫改良され、精巧な木櫛を生産できるようになりました。

また、「西筑摩郡誌」には1718年（享保3）に塗師源右衛門が殺されてから木櫛製造に転じたという記述もあります。

江戸時代の作家、山東京伝が1807年（文化4）「於六櫛木曽仇討」を書いたことで、お六櫛の名が全国に広まりました。

1838年（天保9）の「書き上げ」によると、薮原宿の木櫛売上代金は、おおよそ1,500両で、当時としては莫大な収益をあげていました。1848年（弘化5）の「薮原宿職業別戸数一覧」には、「細工櫛三、櫛商一九、櫛磨き一九、櫛挽き二三九人」とあり、全戸数の6割が櫛の生産に従事していたことが記録されています。

薮原宿は、飛騨街道奈川道との分岐点にもなっており、古くから交通の要所として発展してきたことも、お六櫛の流通を後押ししました。

●製作工程

お六櫛の製造工程は、大きく「櫛木の準備」「櫛木削り」「櫛の歯作り」「櫛の仕上げ」の四区分に分かれ、およそ15の工程からなっていました。
かつては問屋から櫛木を持ち帰り、職人が板削り、歯挽きを、女子供が櫛の歯通しや磨き仕事をおこなうという分業（問屋制家内工業）で作られていました。
現在では「櫛の磨きと総仕上げ」の段階まで櫛職人がおこなっており、およそ20工程で一枚のお六櫛を完成させています。

主な工程は次のとおり。
- **削り：櫛木を規定のサイズに整える・筋を付ける**
- **歯挽き：櫛の歯をつける**
- **耳突き・耳丸め：櫛の角を加工する**
- **磨き：下磨きと艶出し**
- **油ひき：総仕上げ**

「お六櫛」の語源

大田南畝（蜀山人）は、「壬戌紀行」（1802年（享和2））において、「お六といへる女はじめてみねばり（峰榛）の木をもて此櫛をひき出せり。」と述べています。お六の出身については妻籠説、薮原説、清内路（下伊那郡）説があり、定かではありません。

髪のフケの方言オロコが訛ったものという説もあますが、蘭村に保管されている江戸時代のお六櫛の寸法がみな六寸であることから、櫛の寸法をお六と女性の名前風に読んだことが始まりではないかという説もあります。

材のミネバリについて

カバノキ科カバノキ属の落葉広葉樹（学名：Betula grossa（Betula schmidtii））。「斧が折れるほど硬い樺の木」なので「斧折樺（オノオレカンバ）」とも呼ばれます。ミネバリの呼称名は地方名で、山の岩地から「峰に張り出す」ように生育することに由来するともいわれます。

藪原では、江戸時代から明治・大正と、上伊那から下伊那にかけて南アルプス山系に入り採取加工した記録が残っています。過酷な環境に生育するためその生長はきわめて遅く年に0.2mmほど、緻密な木目になり、水に沈むほど重い。また、硬いだけでなく弾力があり、狂いも出にくいことから、お六櫛のような細かい歯の櫛の材としては最適でした。

櫛の種類

お六櫛は用途別に梳き櫛・解かし櫛・挿し櫛・鬢掻き櫛などがあり、さらに形や大きさ、歯のつけ方などの違いによってそれぞれに様々な名前がつけられています。

●梳き櫛（透き櫛）

髪のフケや汚れ、ホコリを梳いてとりのぞく、頭髪をクリーニングするための櫛。歯の間隔はいずれも0.5mm 以下と細かく、毛髪の1本1本を梳く事ができるようになっており、毛髪の表面を一定方向へ美しく整え、毛髪本来のツヤを出す効果があります。戦後、シャンプーの普及と洗髪の習慣化によって生産量が激減しました。櫛のサイズは三寸～四寸四分程度。歯数は一寸あたり29～42本です。

●解かし櫛（解き櫛）

結っていた髪をほどき、毛髪を揃えるのに用いるやや歯の粗い櫛。現在はスタイリングするために使用されています。櫛のサイズは五～六寸で、櫛挽職人は一寸あたりの櫛歯の数から以下の六種類に分けています。梳歯（15本/寸）相細（14本）相歯（13本）相太（12本）挿荒（11本）荒歯（10本）

●挿櫛（飾り櫛・塗櫛）

髪を結ってから、髪の乱れ を整えたり、髪に挿して飾りに用いた。「飾り櫛」とも呼ばれています。

●結櫛

いわゆる日本髪、チョンマゲなどを結うために用いられた櫛。主に髪結師、床屋など理髪専門職のために供給されていました。現在でも一部は相撲取り、時代劇等に関わる職種で伝統的に使用されています。

昭和・平成の櫛師、故 青柳和邦さん

ある雑誌に「木曽木櫛。山深く残る伝統」のタイトルで『木曽の山中、薮原に伝わる木櫛。櫛を挽くその人は、「伝統工芸士より櫛職」と胸を張る。その薮原で、木櫛の伝統を守るただ一人の「櫛職」青柳和邦さんがいまも完全な技術を伝えています。』と紹介されています。

1999(平成11)年1月6日にNHK長野放送局が、皇后陛下(現平成上皇妃)、皇太子妃雅子様、秋篠宮紀子様の各御成婚の際に使用した「飾り櫛の木地・素地の櫛」を挽いた方が、青柳和邦さんであることを紹介しています。青柳さんのお店には、松平健さん、松方弘樹さん、山本富士子さんなど日本の代表的な俳優さんの色紙が飾られ、皆さん櫛を求めてはるばる薮原までおいでいただいたことが伺えます。

また國學院大学教授、櫛の研究者として著名な樋口清之先生は、「稀に見る、もの創りびと」と雑誌で紹介しています。

「お六櫛」の民話

木曽の妻籠の旅籠屋にお六という美しい娘がいた。そのお六が頭痛に悩まされるようになり、旅人が諸国から薬を持ち寄ったが、どんな薬も効かなかった。

お六が御嶽山に願を掛けて断食したところ、「峰のミネバリで櫛をつくり髪をとかせ」とのお告げがあった。お六がそのとおりにすると痛みが嘘のようにひいた。お六はこの櫛を同じ病で苦しむ人に分けたいと思い、櫛を作っては配った。お六の櫛はたくさんの人に喜ばれ、その評判は旅人たちによって国中に広められた。

やがて材料のミネバリが妻籠で足りなくなり、木曽川の上流、鳥居峠まで求めるようになった。薮原の人は、自分の村からお六の櫛の材料になる木が持ちだされていくのを見て、自分達でも作ってみたいと考えた。

そのころ、鳥居峠のトチの空洞に捨てられ、薮原の女に育てられた松吉という男が、お六の旅籠屋の下男をしていた。松吉は風呂焚きの燃料に、制作に失敗したお六の櫛を使っていたので、そのうち作り方を覚えた。そこでお六の許しをもらって薮原に帰り、お六から教わった櫛の作り方をみなに伝授した。そうしてお六櫛は妻籠から薮原が中心となり、繁盛した。

(出典:『信州むかし語り 白山と民の話』はまみつを(しなのき書房 2011)より要約)

木祖村郷土館

「お六櫛」をはじめ、300年の伝統をもつ勇壮華麗な「薮原祭」、薬草の産地でもあった村の人々の暮らしぶりを伝える資料が展示されています。お六櫛のコーナーでは、当時の櫛職人の仕事場が再現されており、事前に連絡をすれば職人の実演が見学できる場合もあります。透き櫛・とかし櫛の製造工程から道具、その他櫛に関する文献史料、20分ほどの制作工程の映像などを見ることができます。

住所:木曽郡木祖村薮原189-1
開館期間:3月1日～12月25日
営業:9:00～16:30(入館は～16:00)
定休日:月曜日(祝日の場合は翌日)
入館料:大人300円、子ども100円(中学生以下)
連絡先:木祖村民センター／TEL 0264-36-2349

●お六櫛の製作体験

予約制でお六櫛が製作できます。専用の道具を使いながら、細かい作業を体験。

料金と所要時間:手引き4,000円／人、約4時間
みがき2,500円／人、約1時間半
受け入れ可能人数:3名～15名
会場:村民センター等(公共施設)
連絡先:木祖村観光協会／TEL 0264-36-2543
※予約は3名以上から

■主要参考文献／『木曽のお六櫛』(木曽郡木祖村教育委員会 1975)　『信州むかし語り 白山と民の話』はまみつを(しなのき書房 2011)
『手づくりと郷土玩具』(信濃毎日新聞社 1982)　『中日新聞』(1981年3月15日)

構成文化財㉟ 工芸 南木曽町

南木曽ろくろ細工（なぎそろくろざいく）

■基本データ

発祥	南木曽町 江戸時代前期より
主な製品	木地鉢、茶櫃（ちゃびつ）、盆、汁椀など
指定	国伝統的工芸品（1980年）
共同組合	南木曽ろくろ工芸協同組合 ／TEL 0264-58-2434

ろくろ細工とは、奈良時代より伝統的に作られている円形の挽物（ひきもの）。ケヤキやトチなどの木目の美しい木をろくろで回転させながら、カンナでくり抜いて盆や碗などを作る伝統技術です。妻籠宿から国道256号線を車で飯田方面へ20分。「木地師の里」があります。明治時代に広葉樹の巨木を求め全国の奥山を移動した木地師が定着し、今も先祖伝来の仕事を続ける日本で唯一の歴史ある集落です。

漆畑の木地師が伊那の遠山谷から移って来たのは明治10年代。「手挽ろくろ」で仕事をしていましたが、明治の終わり頃、阿島傘（あじまがさ）の産地（下伊那郡喬木村（たかぎむら））から水車を動力とする「水車ろくろ」が伝わり、大きな木地も挽けるようになったことで、ろくろ細工の産地としての評価を高めました。

現代も主に木地鉢（きじばち）、茶びつなどが作られますが、サラダボウル、フリーカップ、花器（かき）などモダンな作品を作っている工房もあります。1980年（昭和55）、木目の美しさを最大限に引き出すその技法が評価され、「南木曽ろくろ細工」として国の伝統的工芸品に認定されました（ろくろ細工では唯一）。

●製作工程

選木から仕上げまですべての工程を一人の職人が行います。

①選木
国産のトチ、ケヤキ、セン、カツラなどから原木を選ぶ。木の皮をはいで汚れを落とし、木口面や表面を細部まで観察し、伐採時期や成長過程、木の特徴を見極める。作る製品は木の質によって変わるため、入念におこなう。

②玉切り・挽き割り
原木を輪切りにし、切った面を上にしてだいたいの大きさに挽き割る。

③丸め
木目を生かすように気をつけながら外側を切り落とし、円形、楕円形に整える。

④荒挽き
ろくろを使って厚めにカンナで挽く。

⑤乾燥
木の含水率が10%程度になるまで乾燥させる。電気で乾燥させる場合は約１カ月、ストーブやいろりのある場所で乾燥させる場合は約３カ月。大きなものでは３年かかることもある。さらにこれを自然の中に置き外気ならしをして含水率12%ぐらいまで戻す。乾燥させる時間は含水度で判断する。

⑥仕上げ挽き
ろくろを使い、カンナで仕上げ面を滑らかにする。

⑦仕上げ磨き
ろくろを使い、紙やすりを使って磨き上げる。

⑧トクサ磨き・漆磨き
白木製品は、水をつけながら「とくさ」や「すぐきわら」を使い磨いていく。漆磨きは生漆を３～６回すりこみながら磨いていく、いわゆる漆拭き。

南木曽ろくろ細工の歴史

明治10年代、南木曽町の漆畑や南沢は伊那谷に近く、トチなどの広葉樹が豊富にあり、木地師にとっては恵まれた地域でした。当時の蘭の庄屋が呼び寄せ、多くの木地師が移住しました。

明治時代、漆畑で多く作っていた挽物は「切板」と呼ばれたまな板や、「丸膳」という食事の際に各自が使うお膳でした。養蚕が盛んとなり、蚕を広げる浅い盆なども作られました。これらの挽物は清内路村に多く残されています。

木地師の挽物、ろくろの動力の歴史をみると、他の地方では千年以上も続く「手挽ろくろ」から、稲の穂を落とす脱穀機のような「足踏ろくろ」へと移ります。しかし、漆畑では「手挽ろくろ」から一気に「水車ろくろ」へと移行。この「水車ろくろ」の使用と豊富にある広葉樹により、大きなお盆や、こたつ板に使われる直径3尺もの「広蓋」、うどんを練る「木地鉢」などが作られ、漆畑の技術と生産性は大きく向上しました。1947年（昭和22）には電動ろくろが導入されました。

昭和30年代になるとプラスチック製品の出現で新しい営業形態が生まれます。水害の被害もあり、漆畑から南木曽の三留野、岐阜県坂下町、中津川市などへ移住し都市部で仕事をする業者が現れました。さらに妻籠宿を中心とする木曽路観光が賑わいをみせると「木地師の里」として地域を代表する観光スポットとなっています。

漆畑には、いまも小椋、大蔵を名乗る木地師の末裔の職人が多く住み、工房を営んでいます。

南木曽の職人はずっと製造卸でやっていましたが、1975年（昭和50）くらいからはそれぞれが店を出して直売も行うようになり、観光客も来るようになりました。組合員はいま5軒に減っていますが、家具や仏具を手がけたり、スピーカーやボールペンを作ったり、それぞれが特徴を打ち出して時代に好まれる製品づくりを心がけています。2016年（平成28）からは東京の青山スクエアで展示販売を開き、木曽の技術力の高さを積極的にアピールしています。

南木曽ろくろ細工の素材

トチのほか、ケヤキ、センなども使います。トチは木目の構造が複雑で美しい木目が出ますが、挽くのは難しく高度な技術が要求されます。木目や木質、全体の雰囲気などを観察し、木によって作る製品を決めるといいます。

南木曽ろくろ細工
木地鉢

■主要参考文献／『木曽谷の木地屋』（楯英雄 1980）
『信州秋山郷 木鉢の民俗』（日本木地師学会編 川辺書林 2010）

職人ごとのろくろカンナ

ろくろで木を成形するためのカンナには様々な種類があります。ろくろ細工の製作工程は職人がひとりですべて行いますが、このカンナ作りもそこに含まれ、ろくろ細工職人は自分の道具を自ら作ります。

●主な製品

・茶盆
南木曽ろくろ細工の主要製品。昔ながらの縁の高い深盆をはじめ、給仕盆、薄盆などがあります。素材はトチがほとんどでしたが、昭和40年代頃から木目の鮮やかなケヤキ、センなどが使われるようになりました。茶盆は挽物のなかでも大きいため、木目が存分に楽しめます。特にちぢみ、コブ、シカミ、カスリなどの木目は珍重されています。

・茶櫃（ちゃびつ）
茶器を収納する器で、蓋は裏返すと盆として使えます。昭和になってから作られましたが、実用性と木肌の美しさで需要が増し、一時は総売り上げの６割が茶櫃と茶盆で占められたほどでした。

・広盆（広蓋 ひろぶた）
直径60センチ以上のもの。大きいため、木目が全体に広がる文様が楽しめます。

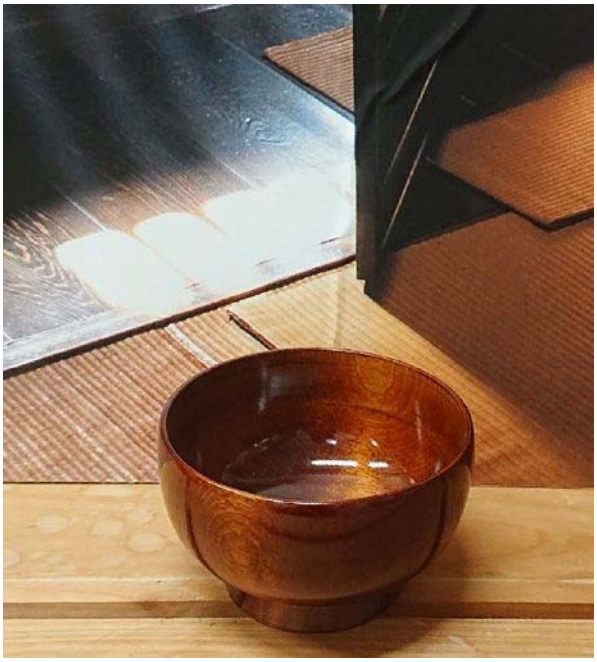
・他に、
菓子器、茶たく、銘々皿、茶筒、箸立て、湯のみ、汁椀、二段重など。

伝統工芸士

南木曽ろくろ細工の職人には、一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会により「伝統工芸士」に認定された人が8名います。伝統工芸士とは、経済産業大臣指定の国の伝統的工芸品の製造に従事している技術者の中から高度の技術・技法を保持していると認められた者です。

溜塗椀（ためぬりわん）

摺漆（すりうるし）を施してあるお椀の上に更に溜漆（ためうるし）を施す「溜塗椀」は繊細な木目が透けて見える作品です。



伝統工芸士の田上次男氏作　「溜塗椀」

工芸街道まつり

2001年（平成13）より11月最初の土日曜日に南木曽町で開催される、南木曽町の工芸品イベントです。国道256号沿いで南木曽ろくろ細工（国指定伝統工芸品）、蘭桧笠（県指定伝統工芸品）、桶などの木工品の実演・特売が行われ、観光客を楽しませています。

■主要参考文献／『日本の伝統工芸４ 中央高地』（ぎょうせい 1985）
『木地師光と影―もう一つの森の文化―』（日本木地師学会編、牧野書店 1997）

構成文化財㊱ 工芸 南木曽町

あららぎひのきがさ

蘭桧笠

■基本データ

発祥 南木曽町 江戸時代～

指定等 県伝統工芸品（1982年）

共同組合 蘭桧笠生産協同組合

／TEL 0264-58-2727

ヒノキを短冊状に加工した「ひで」と竹で作られる伝統的な編み笠。江戸時代から、南木曽町の蘭（あららぎ）地区で作られ続けています。軽くて風通しがよく、防水性にも優れているため、日よけ雨よけに適しています。農作業の際や船頭、御嶽山詣での人達に愛用され、江戸元禄期には年間10数万枚、明治最盛期には100万枚近く生産されていました。

飯田市大平のまんじゅう笠

蘭から木曽峠（大平峠）を越えた大平街道の大平。ここでは頭部の丸い「まんじゅう笠」が戦前まで作られていました。材料は蘭の桧笠と同じ桧の「ひで」で、下伊那地方で使われていたようです。遠山上村では「丸笠」「かぼちゃ笠」と呼ばれていました。

●製作工程

①玉切り
原木を必要な長さに切る。

②「ひで」作り
玉切り材を旋盤にかけて薄い板にし、裁断機で細く切り揃え、ひでに加工する。昔は鉋で薄く長く削っていた。

③編み組
ひでをイカダ編みにする。

④竹さし
円錐形に成型したもの（やまぶし）の内側に竹を差し込む。
これは強度補強のため。

⑤輪竹つけ
輪状の竹をやまぶしの内側に、ひでを曲げて仮り付けする。

⑥断ち切り
固定した輪竹に沿って、笠の縁切りをする。

⑦縁つけ
断ち切りした周囲に縁を二つ折りにして、笠針を使って糸で縫い付けて完成。

③から⑦のひでを編む工程は、組合員の家でおこなわれ、農作業などのかたわらに、内職で編まれている。ほぼ一日作業して、3蓋（かい）作るのが精一杯という。
＊桧笠を数える単位は「蓋（かい）」

●さし竹

強度を高めるために差す竹（さし竹）や輪竹は、12～2月の農閑期に一本一本手作業で削って作っている。この竹を入れることで、笠の強度が増すという。

■主要参考文献／『大平の民俗』（飯田市教育委員会 信濃路 1972）

伐採から仕上げまで一貫して行う伝統の桧笠

蘭桧笠（あららぎひのきがさ）は標高705mの木曽の山奥で江戸時代中期から作られている、350年の伝統を持つ編笠です。軽くて丈夫で、ヒノキのいい香りがすることから、木曽の名産として親しまれてきました。伐採から仕上げまで一貫して行うのが特徴で、すべて手作りです。

原木の伐採や加工など、力のいる作業を男が受け持ち、編むのは女性の仕事でした。慣れた編み手でも9時から16 時までかかって3蓋（かい）しか作ることができないほど手がかかります。丁寧に作られた桧笠は雨もしっかり防ぎます。現在、編み手の数は25名ほど。課題は後継者の育成で、年に2 回、冬場に育成講習会を行っています。

飛騨から伝来した桧笠

蘭桧笠は江戸時代初期に飛騨の落辺からの移住者によって伝えられたもので、「落辺笠」と呼ばれていました。作った桧笠は、岐阜県恵那地方、天竜川流域の上伊那、下伊那、静岡県、愛知県の山間部まで売り歩き、「蘭笠」とも呼ばれています。民謡伊那節に「天竜下ればしぶきにぬれる。持たせやりたや桧笠」と歌われています。

1708年（宝永5）、木曽地方を配下に置く尾張藩が木曽五木の伐採を禁止したため、モミやツガで笠を作っていたといいます。昔は蘭に嫁入りしてきた女性は、姑に桧笠の編み方を習い、それができてこそ一人前の主婦と言われたそうです。

桧笠作りの体験や製作体験ができます。

●桧笠の家（蘭桧笠生産協同組合）

各種ある笠のほか、サンバイザーや靴の中敷きなどを販売しています。隣の工房で笠作りの様子を見学したり、地元の作り手から教わりながら、小さな笠を作ることができます。3人以上、ひとり2,000 円。所要時間 2 ～ 3 時間。要予約。

住所：木曽群南木曽町吾妻3321-1
営業時間：9:00～17:00（12 月1日～3月31日は休業）
定休日：月、水曜日
連絡先：TEL 0264-58-2727

■主要参考文献／『日本の伝統工芸４ 中央高地』（ぎょうせい 1985）
『信州の伝統工芸の技を訪ねて』（上野滋数/撮影・著 ほおずき書籍 2005）
『手作りと郷土玩具』（信濃毎日新聞社 1982）

構成文化財㊴

工芸

塩尻市・木祖村・王滝村・木曽町
上松町・大桑村・南木曽町

木曽材木工芸品（きそざいもくこうげいひん）

■基本データ

主な生産場所　エリア全域
産地組合　木曽木材工業協同組合
住所　木曽郡上松町大字荻原1579-3
TEL 0264-52-5500
指定　県伝統的工芸品（1982年）

木曽における特色ある木曽材木工芸品

木曽の御料林から国有林への移管と、1959年（昭和34）の伊勢湾台風での国有林のおびただしい風倒木によって、新しい木曽材木工芸品が作られるようになりました。次のような特色のある工芸品が作られています。

1.木曽ヒノキのまな板

ヒノキのまな板は殺菌力があるということで作られるようになりました。料理店で使われる寿司用のまな板が人気です。

2.料理用舟（ヒノキ舟盛用の器）

舟の形を作るには高度な技術が必要で、大桑村で多く作られています。表面に透明ウレタンを塗って仕上げます。

3.木曽ヒノキの枝を素材とした茶托・銘々皿

伊勢湾台風で倒木したヒノキの枝を利用して、茶托や銘々皿が作られました。枝を輪切りにし、ボンドを塗り乾燥させ、ろくろで仕上げます。

4.木曽ヒノキの香（ひのか）

ヒノキの香りを抽出した商品も数多く作られています。消臭・除菌効果を活かした入浴剤やスプレー、リネンウォーターやキャンドルなどが人気です。

5.木曽ヒノキの建具 欄間・組子・組子細工

木目の詰まった木曽ヒノキは繊細な組子の材料に適しているため、全国の建具屋から需要があります。JR九州の豪華列車の装飾にも使用されました。障子や天井、衝立、テーブルのほか、照明なども作られています。

6.木製の名刺・しおり・はがき

木曽五木を紙のように薄く加工し、薄い板の間に和紙を貼り合わせ切断します。木目の繊細さと木によって異なる色の違いが美しい製品です。

7.業務用板物製品

スーパーで一使用する板物、ペリカバーや、カセットコンロの箱など多くの種類の板物が作られています。

8.木曽ヒノキの手作り桶

高度な技術を必要とする桶職人が作る巨大な風呂桶は、全国の観光施設から需要があり、韓国、香港など海外にも人気です。

9.木曽ヒノキの摺り漆箸

木曽材木工芸品の中で最も多く作られているのが箸です。白木に摺り漆を施した茶褐色の箸は、軽くて汚れがつきにくく値段も手頃です。他にも特有の彫刻や、研ぎ出し模様を施した木曽塗りの箸など芸術的な箸もあります。

木曽材木工芸品は
木曽郡内のお土産店などで購入できます。

木曽材木工芸品の後継者不足の課題

人口4,000人を切った南木曽町や上松町など、工芸品産業の中心地では人口の減少が止まりません。磨き上げた技術があっても、後継者がいないため廃業を余儀なくされることもあり、今後の大きな課題となっています。

構成文化財⑪

自然・景勝地	木曽町
文化	南木曽町

木曽馬（きそうま）

木曽馬の里マップQR

■基本データ

主な飼育場所	長野県木曽地方、岐阜県飛騨地方
飼育数	2017年（平成28）現在、全国で約140頭 ※純血種は絶えている。 （うち開田高原に37頭／2017年6月現在）
保存会	木曽馬保存会事務局 木曽郡木曽町開田高原末川5596-1 （木曽馬乗馬センター内）／TEL 0264-42-3085
指定	県天然記念物（1983年）
祭事	田立の花馬祭り
開催日	毎年10月の第１日曜日
場所	五宮神社（いつのみやじんじゃ） 木曽郡南木曽町 田立元組415
指定	県無形民俗文化財（1983年）

古くから木曽で飼育されていた「木曽馬」は、日本在来馬の一つで、長野県の天然記念物に指定されています。北海道の道産子や宮崎県の御崎馬と並ぶ日本在来馬種で開田高原に「木曽馬の里」があり、現在保存会が種の保存に取り組んでいます。比較的おとなしい気性の木曽馬はホースセラピーに適しており治癒と癒しの場とする計画です。

また、南木曽町に伝わる五穀豊穣に感謝する「田立の花馬祭り」では木曽馬が集落を練り歩きます。

平安時代から軍事用、農耕用として大切に育てられてきました。

歴史的背景

木曽馬の先祖は蒙古系の馬といわれ、現在の馬の起源は2000年ほど前の縄文後期に飼われていた、小型の馬といわれています。

木曽の馬産の歴史は古く、大宝律令（701年）による牧場の制度化で、霧原牧（現在の岐阜県中津川市神坂辺り）において馬が生産されていたという記録が残ります。

その後、木曽街道の開通によって農耕文化が定着し、馬たちは山間高冷地の厳しい自然に適応する農耕馬として育てられました。

江戸時代には、木曽の代官・山村家がおこなった「毛附（けづけ）制度」によって木曽の馬産が確立します。それは領内の当歳駒（その年に生まれた馬）の戸籍をつくって自由売買を禁じ、2歳、3歳と毎年選定を重ねて領内に残す馬と売却する馬を振り分ける、というものでした。このため1760年ごろから馬市が開催されるようになり、福島県白河、鳥取県大山と並ぶ日本三大馬市のひとつとして賑わったといいます。17世紀後半頃からは、農民が富裕な馬主から馬を預かって飼育する馬小作制度が一般的となりました。

日本が軍国主義に傾いていった明治時代、外国の大型種牡馬導入によって、木曽馬は次第に淘汰されるようになりますが、木曽の人々は密かに純系木曽馬の生産を続けていました。木曽の畑作農業の維持に厩肥（きゅうひ）が欠くことのできない肥料だったことも大きな要因ですが、小格（こかく）（小型）の木曽馬は実際に馬の世話をする女性でも容易に扱うことができ、荷物を積んで山道を歩くことも得意だったからです。

何よりも人々は木曽馬の温厚な性格を愛していました。木曽馬の農耕馬としての体型、性質こそが、木曽谷の人々の生活を支えていたといっても過言ではないのです。

やがて軍馬徴発によって数が激減した木曽馬。終戦後、木曽馬の血脈をもつ牝馬が残っていたのは奇跡でした。49頭の牝馬が繁殖馬として登録され、1951年（昭和26）、長野県更埴市（こうしょくし）の武水別神社（たけみずわけじんじゃ）に御神馬として残されていた木曽馬の牡馬神明号と鹿山号との間に牡馬が誕生します。この馬こそが、現在の木曽馬復活の根幹をになった第三春山号でした。

1969年（昭和44）木曽馬保存会結成。1983年（昭和58）には20頭の木曽馬が長野県天然記念物指定され、平成以降はジーンバンク事業（希少家畜の精子凍結）も進められています。そして旧開田村では、馬を飼育する人たちの老齢化をうけ、木曽馬の集団飼育施設として1995年（平成7）に「木曽馬の里」を開設。木曽馬の最後の砦として、最大50頭の木曽馬を飼養することができるようになりました。

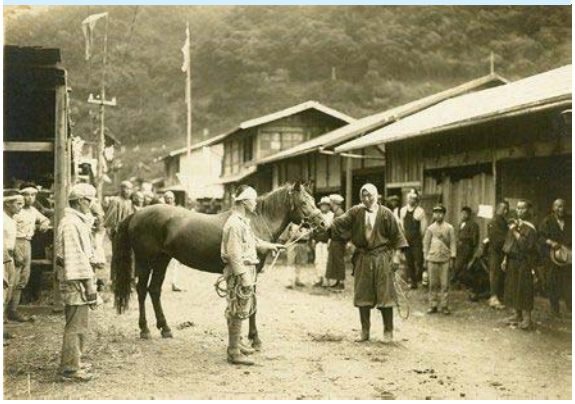
●馬市

木曽の山野いたるところで育てられる馬たちが、放牧中の自然交尾によって繁殖し、それが農家の経済を支える貴重な収入源となりました。1750年（寛延3）に市場の形状が整うと、その期間は大賑わいとなり、盛大な市場へと発展していきました。

徳川幕府が終わりを告げ、山村氏の統治から離れた明治時代になると、農家は自由に馬を売買できるようになりましたが、数をさばくには何らかの組織を必要とします。そこで馬市開催の役割を果たすようになるのが、福島村戸町役場でした。

馬市には多くの人が訪れ、買い手は安曇、筑摩、伊那、諏訪、美濃、飛騨、尾張、三河、遠江、甲斐にまで及び、旅籠に泊まりきれない客は、民家が臨時に開いた宿に宿泊しました。馬を売った農家もまとまった買物や飲食をして、芝居や屋台も多くきて福島の町はおおいに賑わいました。酒席ではさかんに木曽節が踊られ、「木曽のなかのりさん」が天下に知られたのは、御嶽山の登山客と馬市の買い手客のおかげともいわれています。

＜1886年（明治19）創立当時の記録より＞
・組合員数 3,232 人（畜用人含む）
・種牡馬頭数 48 頭 ・種牝馬頭数 4491 頭
・産駒頭数 1,263 頭
・売買頭数 1,652 頭
・同売上金高 11,163 円75 銭
・一頭平均 6 円75 銭
＊注：1891年（明治24）の巡査の初任給が８円



木曽馬市（木曽町文化財資料室所蔵）

■主要参考文献／
『信州木曽馬ものがたり』（黒田三郎 信濃路 1977）
『木曽路大紀行～よみがえる木曽人の物語
＜信州の大紀行シリーズ２＞』（一草舎出版2007）
『木曽義仲物語』（信濃教育会出版部 1988）
『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞出版 1994）
『木曽・御岳わすれじの道紀行』（田中博 風媒社 2008）
『あれこれ木曽町再発見 木曽町を学ぶ』
（木曽町を学ぶ本つくり検討会 木曽町観光協会2013）

木曽馬の特徴

木曽馬は、日本に昔から飼われていた「日本在来馬」とか「日本和種」といわれる馬です。中型馬に属し、体高は平均133cmです。険しい山間高冷地で長年飼育された木曽馬は、厳しい自然環境に適応して極めて強健で粗食に耐え、ひずめは堅く、蹄鉄をうつ必要はありません。丈夫で安定性のある脚は、狭い山路でも踏み外すことなく急な坂道を安全に上り下りすることができます。

●性格は一般的におとなしいとされるが、頑固な面もある。子育てと一緒で、甘やかせば人を見下すようになるし、厳しすぎれは人に怯えるようになる。馬ごとの個性もあるので、育てるときはそこを見極めることが大事。

●栄養の少ない草で暮らしてきたため、腸が長く、腹がボテッと見える。そのため妊娠しているのかと勘違いされることがよくある。

（木曽馬保存会事務局スタッフ・談）

●木曽馬の里

開田高原の広大な草原にあり、乗馬体験や厩舎見学ができます。御嶽山の全容も見え、草をはむ馬は開田高原ならではの風景であり撮影ポイントになっています。

住所：木曽町開田高原末川5596-1

連絡先：木曽馬乗馬センター／TEL 0264-42-3085

●開田郷土館

馬具や馬の医術書を展示、農具・民具なども紹介し、開田高原の歴史を解説しています。中でも純血木曽馬「第三春山号」のはく製は貴重です。

住 所：木曽町開田高原末川1899-4

連絡先 木曽町役場開田支所／TEL 0264-42-3331

田立の花馬祭り

花馬祭りは、毎年10月の第1日曜日に、豊作・安産・家内安全などの諸願成就を感謝して五宮神社で行われます。南木曽町田立地区の五宮神社は、1908年（明治41）に、南宮社・大平社・八幡社・熊野白山社・神明社が合祀し、南宮社だったところにおかれました。花馬は、湯立てを行っていた神明社を除く4社で行われていたもので、田立の古い文書によると300年以上前から伝わっています。

先頭馬には神が宿るヒモロギを、中馬には豊作を表す菊を、後馬には南宮社社紋の日月の幟を立て、そのまわりに五色の色紙によって稲穂をかたどった竹を365本ほど差し回しています。花馬の名称はこうした飾りから生まれました。なお、神馬は純系木曽馬です。

正午過ぎ、田立の駅前を出発した花馬の行列は、五宮神社の幟を先頭に各地区の代表、その後ろに笛・太鼓の囃し方、最後に花馬3頭がついて、五宮神社をめざしてゆっくり進みます。五色（青・黄・赤・白・黒）の幟はそれぞれ、明るい空・豊かに実った五穀・太陽・澄んだ水・肥沃な耕地を示しており、五穀豊穣とそのよき天恵への感謝を表しています。

花馬の行列が神社に到着し、境内を3回まわり終えると、人々が一斉に馬に飛びついて花を取り合います。花を家に持ち帰って、家の入り口にさすと家内に厄病神が入らない、畦にさすと虫除けの守りになるといわれています。特にヒモロギを取った人には最大の幸福があるといわれています。

構成文化財⑭ 建造物 木曽町

県宝山下家（けんぽうやましたけ）

■基本データ

住所 木曽町開田高原西野2730-5

アクセス JR「木曽福島駅」からバス60分、伊那ICから60km80分

連絡先 TEL 0264-44-2007

指定 県宝（1994年）

マップQR

山下家は、代々「馬地主（うまじぬし）」として栄えた豪家で、現存する住宅は1865年（慶応元）から翌2年にかけて建築されました。開田高原の往時の特徴を伝える最大規模の民家であること、建築年代が明らかで内部の建築意匠が優れていることなどから、長野県宝に指定されました。住宅内では、山下家伝来の馬医書や調薬器具、古文書や書画などが 展示されているほか、1891年（明治24）築の土蔵（開田考古博物館）では、「柳又（やなぎまた）ポイント」と呼ばれる有舌尖頭器（ゆうぜつせんとうき）をはじめ、旧石器時代から縄文時代の遺物・出土品を展示しています。

江戸時代初期に飛騨から現地へ移り住んだ山下家は、1804～1818年（文化年間）から漢方薬の製造を始め、「伯楽（はくらく）」と呼ばれる馬医を兼ねた馬地主の家として繁栄します。明治から大正初期には300頭余りの馬を所有して各地の農家に貸し付け、仔馬の売却代から収入を得ていました。やがて、大正・昭和の農村不況をはじめ、戦後の社会構造の変革や農林業の機械化などの影響を受け、木曽馬の需要が減少するとともに衰退をたどりました。

建物の特徴

間口11間余、奥行8間余、木造一部二階建の「切妻造（本棟造）」で、主材にマツやナラを使用し、大黒柱にはケヤキ、座敷には木目の細かいツガが用いられています。現在は鉄板葺きですが、建築当初は板葺きの上に石を置いて押さえにしていました。屋根の最頂部には「雀踊り」や「懸魚（げぎょ）」といった装飾が取付けられています。

間取りの特徴

「台所」を中心とした中央の居間は約30畳の広さを誇ります。御嶽山麓は寒さ厳しい高冷地であるため、二つの囲炉裏を 設けたと考えられています。屋内の南側に3～4頭分の大きな馬屋があるのも特徴で、人と馬とが一つ屋根の下で暮らしてきた開田高原の民家の特色をよく示しています。

純血木曽馬「神明号」ブロンズ像

1951年（昭和26）、彫刻家石井鶴三氏が山下家に滞在し、純血木曽馬「神明号」をモデルにブロンズ像をつくり、当家に寄贈されました。

神明号は1939年（昭和14）に木曽郡内で生まれ、県内更埴市（現在:千曲市）八幡の武水別神社に御神馬として奉納され、戦時下の国の統制からのがれて戦後木曽馬復元の祖となりました。木曽馬としての高純度の血液をもった種雄馬でした。

■主要参考文献／『長野県宝 山下家住宅修理工事報告書』（開田村教育委員会 1999）
『開田村誌』（開田村役場 村誌編纂委員会 1980）